

# 「年報'97」発刊にあたって

総合理学研究所長 杉谷嘉則

総合理学研究所「年報'97」が刊行の運びとなりました。記載の内容・様式は従来通りですが、今回から新たに「研究レポート」の部を設けました。本年報には理学部の紀要のような役割を果たすことを積極的には謳っておりませんが、そうした機能を盛り込むことも良いのではないかと感じています。最近、たとえば修士の研究発表（卒業研究発表も含めて）に臨んだり、あるいはその予稿集等をみるにつけ、理学部の研究活動にもいろいろ多様性や奥行きが感ぜられるようになって参りました。これらの発表がいずれ学術論文につながっていくことが理想ですが、必ずしもすべてそうなるとは限りません。そのような場合、それらの成果が単に卒業論文・修士論文という形でしまい込まれてしまわずに、何らかの装いが付加されて、より人目に触れる形に印刷化されることは意義あることと思われれます。このような意味で年報をもっと積極的に活用してよいのではないかと考えます。

さて、以下は折あって研究所のあらましを簡単にメモしたものです。フォーマルなものではありませんが、研究所の概要を手短かにつかんでいただくには便利かと考え、ここに再録させていただきます。

## 【目的および構成】

### (1) 目的

共同研究の推進および広報活動（規程集の表現とは多少異なる）

### (2) 構成

理学部教員、特別所員および客員研究員

特別所員とは理学部教授で定年を迎えられた方であり、客員研究員とは本学の教員ではないが、一定の研究歴もあり、本学での教育研究に力添えを願っている方々である。

## 【研究所の活動など】

### (3) 共同研究

研究所が推進する「共同研究」は、学科あるいは学部間にまたがる形で複数の研究者がグループを組み、特定のテーマにつき広範のシステムで研究を進めるものである。必要によっては学外あるいは海外からの研究者を混えたりもする。

### (4) 広報活動

研究所が推進する「広報活動」とは、研究所が学内と学外の学術交流の接点として機能しようとするものである。特に、大学から国内外に向けて知識・情報サービスを行うことをポイントとしている。

具体的には、「フォーラム」、「講習会」、「講演会」、「シンポジウム」等を主催あるいは共催している。

### (5) 研究所報（年報）の出版

研究所の活動を「年報」の形でとりまとめ配布している。

内容は、Ⅰ事業報告、Ⅱ原報、Ⅲ研究レポート、Ⅳ共同研究成果報告、Ⅴ所員著作リスト、その他である。

## 【研究所の将来展望など】

### (6) 講習会の一層の充実

これまで「湘南ハイテクセミナー」を年2回の割合で開催している。テーマは“機器分析の原理と応用”を中心としている。講師は、本学教授、国立大学教授が担当し、受講者は神奈川、東京近辺の各種会社の比較的若い研究者が主体である。受講料は大学に還元されている。好評の企画であり、将来的には、テーマの拡大、企画回数増、の方向で検討している。

このほか、「包装フォーラム」(年1回、通算9回、主催)、「平塚シンポジウム」(年1回、通算7回、共催)が定常的なものとして開催されている。

### (7) 講演会、シンポジウム等の弾力的運用

基本的には、講演会もシンポジウムも年度始めに計画された予定に従って実施されている。しかしながら、時として、年度中ばに当初に予定された企画以外の講演会、ミニ学会等を開催する必要に迫られる事態が発生する。しかもこれらの事態は、特定の学科・分野というよりむしろ学科間にまたがるような領域でしばしば発生する。このような際に、研究所に与えられた枠を利用してこれを開催することが可能となる。研究所の持つこのような機能は、実際の便宜性の面で有意義である。

昨年(1997)5月、神奈川大学主催の「ノーベル化学賞受賞者講演会」が開催された。この企画も当初は研究所の企画としてスタートしたものであった。初期の段階で研究所が弾力的に対応し得たことが、その後、大学全体の企画へと発展し得たものといえる。

### (8) 人材確保の受け皿として

既述(2)のように、研究所は、本学にとり有用な人材を確保する機能を有している。特別所員も客員研究員も本研究所を通じて、神奈川大学に結ばれており、教育・研究相談、大型装置の有効管理などを通じて、本学に寄与していただいている。

### (9) 理学部、工学部の教職員から「ハイテクセンター(仮称)」設置の要望が起こされている。本「総合理学研究所」の有する機能と通じるものがあり、発展的拡充を視野に入れる必要がある。

### (10) 知的所有権の申請と活用のための受け皿となること。

### (11) 企業からの受託研究の窓口

以上